

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名：地域文化資源と地域の人材を活かした新たな
博学連携事業の創出

事業者名：神戸市立博物館

住所：〒650-0034 兵庫県神戸市中央区京町24番地

TEL：078-391-0035

FAX：078-392-7054

HPアドレス：<http://www.city.kobe.lg.jp/museum/>



連携事業者名：神戸市立湊山小学校 等

会場：神戸市立博物館、神戸市立湊山小学校 等

事業期間：平成22年5月6日～平成23年2月20日

1. 館の使命と本事業の関係

当館では「市民・利用者が集い、神戸を愛し、誇りとする拠り所」になるという使命を掲げている。また、館の創設以来、学校との連携はきわめて重要であるとの認識のもと、博学連携を教育普及活動の重要な柱として取り組んできた。本事業では、地域文化資源と地域の人材を活かし、今までのなかった形の新たな博学連携事業の展開を図った。ここで目指したのはワークショップや連携授業等に市民から募った学習支援交流員が、積極的に携わることを通して、次世代の神戸を担う地域のこどもたちに、神戸市域の優れた文化・芸術に多くふれあう機会を提供することである。このように博物館と市民が協働し、こどもたちとの関わりを持つことで、市民が「わたしたちの博物館」と魅力を感じる地域の文化的・学術的中核施設となることができると考える。

2. 企画内容

①事業目的

博学連携を教育普及活動の重要な柱とする取り組みは、平成20年3月に公示された新学習指導要領や平成21年3月に示された「神戸市教育振興基本計画」においても、「博物館等の積極的な活用」「身近な地域の遺跡や文化財などの観察や調査」が重視されるなど、博物館は、これまで以上に文化活動や学習活動における地域の拠点として積極的な役割を果たすことが求められている。そこで、本事業では、小中学校教育研究会（学校現場の教員）との連携を強化するとともに、地域の人材を学習支援交流員（ボランティア）として積極的に育成していくことにより、今後予想される学校現場のニーズの高まりや内容の多様化に応えるための活動基盤の整備に取り組むものとする。

②事業概要

本事業においては「新たな博学連携事業の創出」を目指し、I. 学校との連携強化、II. 当館所蔵の名品や地域文化資源の活用、III. 学習支援交流員の育成、という3つの具体的目標を掲げて事業の展開を図った。

上記の目的を達成するために、従来から積極的に取り組んできた出張授業と地域文化資源を活用したフィールドワークを組み合わせたプログラムの開発や市民の目線で当館所蔵の名品を活用したワークショップとツールボックスの新規開発などを進めた。また、小中学校教育研究会（学校の先生方）との連携を強化するとともに、公募した学習支援交流員（ボランティア）がすべての事業に参画する体制を整備し、市民、子どもたち・学校、博物館を有機的に結びつけることを目指した。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

「新たな博学連携事業の創出」を目指し、Ⅰ. 学校との連携強化、Ⅱ. 当館所蔵の名品や地域文化資源の活用、Ⅲ. 学習支援交流員の育成、という3つの目標を掲げて事業の展開を図ったが、それぞれが独立したものとしてではなく、相互にリンクしたものと考え、プログラムの開発を進めた。

学校との連携授業拡充と地域文化資源を活用したフィールドワークプログラムの開発

連携授業（出張授業）は、新学習指導要領の実施に向けて、学校からの需要が急増している（平成21年度76校、22年度2月末現在104校）。従来の二次資料やパソコン（プレゼンテーションソフト）を用いた授業形態だけでなく、湊山小学校の教諭とのチームティーチングにより、連携授業とフィールドワークを組み合わせ、学校で学んだことを現地で確かめることで、自分たちの住む地域の歴史・文化財への理解と関心を深めさせるプログラムを実施した。学習支援交流員（ボランティア）も準備から参画し、博物館、学校、地域の三者が協働してプログラムの開発を進めた。

◇学校や博物館での出張授業（事前学習）

《基礎的・基本的な知識の習得》

- ・古代の生活を体験しよう・・・5／7
- ・源平合戦図屏風から見える平家物語・・・6／9

◇フィールドワーク

- ・五色塚古墳や須磨寺、清盛塚を訪問・・・7／9

◇学校でのまとめ



例：湊山小学校との連携授業風景



学習支援交流員による地域文化資源を活用したプログラムの充実

来館者へのワークショッププログラムの企画から制作・運営まで、学習支援交流員（ボランティア）が積極的に参画し、館蔵品を中心に地域文化資源を市民に親しんでもらえるプログラムとなった。

また、より充実させるものとするため、南蛮屏風（重要文化財）の複製やマット状の伊能忠敬の西日本図を作成した。このマット状の地図はこどもが遊び感覚で地図に親しめるものであり、大変好評であった。



例：南蛮屏風複製の活用

(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 413 人

☆湊山小学校連携授業 107名

☆親子で楽しむ体験講座 153名

●ぬり絵でつくる“ハイカラザヴィエル”

7/24, 31 51名

●土器のたく本をとろう！: 8/7 20名

●飾って使ってマイ扇子: 8/14, 21, 28 82名

☆居留地たんけん: 10/23 17名

☆ジュニアミュージアム講座 73名

●オランダ船のひみつ: 6/19 8名

●オリジナル南蛮屏風: 7/3 32名

●秀吉たんけん隊: 7/10 33名

☆古地図ワークショップ: 12/18, 1/8, 22, 2/12
38名

☆こうべ歴史たんけん隊: 1/29 4名

☆来館校のワークショップ 21名



例: 居留地たんけん



例: 古地図ワークショップ

(3) 事業により作成した印刷物等

①事業実施ポスター 1,000部

②こどもたちへの案内チラシ 170,000部
それぞれ、神戸市内幼・小・中学校などに配布

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

南蛮屏風（重要文化財）複製を活用した小学校での連携授業（出張授業）の記事が下記紙面に掲載

☆朝日新聞 平成22年9月23日
朝刊 地域（三田）面

☆神戸新聞 平成22年9月23日
朝刊 地域（三田）面

☆毎日新聞 平成22年9月23日
朝刊 地域（三田）面

☆読売新聞 平成22年9月23日
朝刊 地域（三田）面



例: 学校配布ポスター・チラシ

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

今年度は、従来からの博学連携や地域との連携の取り組みをさらに充実・拡充させるために、学習支援交流員（ボランティア）の参画を積極的に進めることにあった。来館者向けのプログラムにおいては、学習支援交流員の企画・運営によるワークショップを実施した。昨年度の取り組みの課題をふまえ、アイデアから運営まで学習支援交流員が主導となって取り組んだ。その例が「居留地たんけん」や「古地図ワークショップ」であった。特に「古地図ワークショップ」では、自主的な学習会やツールボックスの試作会など定例会以外での活動が多く行われるようになった。こどもが乗って観察できる「マット状の伊能図」はこれら自主的な活動の中から生まれたアイデアツールである。



例：マット状の伊能図の活用

学習支援交流員からは「こどもにわかりやすく説明する難しさを痛感した。」「こどもの楽しそうな顔が見られるとうれしかった。」「できれば、任期を延長してでも続けたい。」などの声が聞かれた。また、参加したこどもたちも「丁寧に教えてもらってうれしかった。」「古地図ワークショップをしたくて来館しました。」など、本格的な取り組みの第一歩として、成功裏に終わった。



例：湊山小学校フィールドワーク

また、新たな事業の大きな柱として、連携授業（出張授業）とフィールドワークを組み合わせ、そこに学習支援交流員の参画を進めた。湊山小学校は、小規模校であることや、毎年、この小学校が歴史学習と地域学習を組み合わせで取り組んできた経緯があることなどを理由にこの事業のモデル校とした。学習支援交流員は、他の小学校での連携授業にも参画し、活動補助などを行った。フィールドワークや学校に出向いて学習支援を行うことで、活動の幅が広がった。学校からは「地域の大人から指導されることで、こどもたちも新鮮な気持ちで授業を受けることができた。」「現地でも専門的な説明を聴くことができてよかった。」という声が聞かれた。

地域人材育成を目指した、学習支援交流員の活動は3年目ということもあり、ようやく軌道に乗り始めた段階である。試行錯誤の中、新しいアイデアにとにかく取り組んでいこうとしてきたが、今後は、連携授業や来館プログラム等の精選やさらなる拡充・充実を目指し、質の高い自主的なものが望まれる。また、学習支援交流員の自主企画のプログラムの企画・運営に関して、今年度は、広報手段が限られてしまい、参加者数の伸び悩みが見られた。早い段階での計画と多様な広報手段を活用していきたい。

地域の文化拠点としての役割を果たすために、今後も学習支援交流員を中心とした地域人材育成を進めていきたい。